

抱負：論説

著者	小原，之正
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 3
ページ	1 1 - 1 5
発行年	1894-02-07
URL	http://hdl.handle.net/2298/4347

抱負

小原之正

英國政界に雷名を轟かしたる偉人、ボルク嘗て人に語りて曰く、若しジョージ三世の時代にボルクの名なかりせば、當時の歴史は一讀する程の價值をかるべしと。吾人之之を讀み、心竊かに其抱負の大に過ぎたるを怪しむたりき。然れども、退て深く考ふるときには、吾人は切に彼が自ら任するの宏大なるを感賞せずんばあらず。蓋し當時佛國革命の餘波歐洲に溢れ、各國の人民は狂奔し、各國の帝王は震懼し、英國の如きも上下一般、民主主義に傾き、憲法を改め、上院を廢せんと欲するに當り、毅然として獨り輿論に反對し、洵し去る洵し來る驚風亂濤の間に於て、英國の社會を無事な経過せしめたるものは、是れ彼れの力にあらずや何ぞ。

我は吾學校中にて品行の模範ありと、自ら信じ自ら任するは即ち抱負あり。我は吾郡の慈善者ありと、自ら信じ自ら任するは即ち抱負なり。我は吾縣進歩の羅針盤なり、吾邦文化の燈明臺ありと、自ら信じ自ら任するは即ち抱負なり。要するに、抱負とは卑屈心なく、依頼心なく、霜に笑ふて芳香を薰する水仙の如く、寒に傲りて清操を持する松柏の如く、嶄然自立、世俗の外に立ち、人に向つて救助を求めず、示導をうらず、神に向つて願を懸けず、己を己れの救助者となり、己れ己れの示導者となり、己れ萬能の神となりて己れ以外に他物を見ざることを。所謂自信の粹あり、自重の極あり。

小なる抱負を有する人は小ある徳あり、大なる抱負を有する人は大ある徳あり。是れ抱負小なれば任小にして、抱負大なれば其任大なればあり。一學校の模範的品行者は我ありとれ抱負を有する人は、一學校相應の品行あり。一郡の慈善者は我ありとの抱負を有する人は、一郡相應の任を盡し。一縣進

歩の羅針盤は我あり、一國文化の燈明臺は我ありとの抱負を有する人は、それ相應の任を盡せばあり。果して然らば、抱負より生ずる徳は如何。

抱負は人をして謹慎精勵を生ぜしむ。支那の文豪六一居士は、天下の木鐸を以て自ら任したる人なり。その文章を草するや、一字一句敢て苟もせず、經營慘憺、食を忘れ眠を忘れ、痛心常より面に表はれたりき。細君一日問ふて曰く、郎君何を以て刻苦にに至る、知らず果して先生の叱咤を恐るゝによるかど。居士答へて曰く、否、先生の叱咤を恐るゝに非ず、只、後世の笑を恐るゝのみと。その精勵謹慎の狀、實に懦夫を起たしむべきあり。而して日常の談話の如きは、殊に謹慎せられしとぞ。

抱負は人をえて勇氣膽力を生ぜしむ。宗教改革を以て自ら任じ、宗教改革の大抱負を有せしルーテルを見よ。彼れ宗教の改革せざるべからざるを看破し、奮然蹴起、眞理を天下に向つて唱道せり。敵人大に怒り、彼れを招き以て糾問せんとす。彼れ將に行んとす、友人大に驚き彼れを止む。ルーテル從容として答へて曰く、危難果して何物ぞ、此世に於て平穩安泰ありと思へる地、曾て危難を脱したること無にあらずや。余は假令如何ある危険あるも敢て之に赴くんと欲すと。又人あり諫めて曰く、行かば直に焚殺せらる可しと。時にルーテル意自若として對へて曰く、屋上の瓦片と一般、多くの妖鬼あらしむるども、余はろの中に入らんと欲するあり。何とあれば眞理を証明することは必要あり。然れども余の生命は必ずしも必要にあらざればなりと。遂に行き、虎吼雷轟の敵人中に立ち、意氣快活絶て憂慮の体なく、自己良心の命する所に任せて、滔々辯じ去り、終に敵人を説服えて改革の礎を定めたりき。嗚呼何ぞ其の勇氣の凜烈ある、何ぞ其の膽力の強大ある、是れ彼れが抱負より生ぜしものに非ずして何ぞ。

抱負は人をして剛毅獨立を生ぜしむ。井伊直弼が幕府閣老の優柔不斷、屈する能はず伸ぶる能はず、進む能はず退く能はず、曠日彌久、天下は日又一日、浸々乎として危害の淵に赴むを慨嘆す。已む自ら内外紛擾の衝に立ち、外に交り内を治めて、幕府の衰亡を救はんどの大なる抱負を持て、大老とするや、直に獨斷を以て各國と條約を締結し。ペルリ來航以來馴致せし、立憲幕府制の基を粉碎して、内治外交の主權は幕府にありて、朝廷と雖も、諸侯と雖も、喙を容るゝを得ざる者ありと叫破す。幕府の過半を敵とえ、天下の全体を敵とし、寒風怒號の中に、凜然として笑を呈する梅花の如く、泰然また嚴乎として獨裁幕府制を斷行し。御養君論に於て、權勢ある諸侯の説を非とし、已れの説に不服なる有司を黜けて、紀州宰相を迎へ。遂に一進して戊午の大獄を起して、獨裁幕府制に尊々たる天下の志士の口を钳せし如き。政略の當否は措て論せず。その獨立獨行、剛毅不屈、他人の言に耳を傾くるなく、毀譽褒貶を顧みず、自ら信じ自ら任じて決行せし、剛毅獨立の心に至りては、上巳式日の桃花と共に、千歳に薰るべし、おれぞ彼れの抱負の力なり。

抱負は人をして忍耐勉強を生ぜしむ。湖畔詩人タルツナルスが、天女の如き妹トロセア嬢に導かれ、詩界の革命家を以て自ら任じ、先づ彼の古人の詩を摸倣し、意味なき失辭を綴りて得意ある古文派、漫りに結構脚色を求めて、奇を讀書社會に衒ふ傳奇派とを排斥して、「我が詩想は、日常生活に於ける異中の同相、同中の異想、即ち人間多數の記憶中に存する所のものなり」とて、新鮮にして健全ある現實派あるものを起して、經營慘憺の中より天地の眞善美を歌ふて讀詩社會に出すや。社會の冷淡ある、一人の顧みるものなく、反て罵詈を以て迎へられ、嘲笑の裡に沒せられしも、彼れは一敗は一敗よき益力を奮ひ、焦心苦慮、叨りに人を怒らず、世を怨みず、また天を尤めず。遂に六十に垂んとする高

齡に至るまで、世上一人の知己なく、一人の讚美者なく、一人の同感者なく、只だトロセア嬢を總ての友として、已を信じ、已を尊び、忍耐勉強、能く其天命を全ふせしは、これ彼れの抱負の力に非ずや。おれのみにあらざるなり。時世の彈劾者と呼ばれしカーリル。全國士民道德の教導者を以て自ら任ぜし濫澤馬琴。我學術の如きと神武より而來幾人かあると云ひし荻生徂徠。其他名家の傳を一々檢索來らば、其抱負が如何に大なる勢力を彼等に與へしかば、思半ばは過ぎん。實に丈夫の心胸面目ある、自主獨行、寛恕柔和の大主部は、抱負に負ふ所大あるべき。

抱負の徳や大あること實に斯の如し。果して然らば、如何せば大なる抱負を生ずべき乎。乞ふ多言するを止めよ。只だ『已れ』を信せよ。『已れ』を信すれば自重必ず生ず。自重とは如何、蘇峰子曰く、自重は自家の天職を信じ、自家の世界に於ける位地を信じ、自家の個人としての眞價を信じ、自ら立脚點を畫し、猛進直前し、敢て自ら愛惜して、自家を墮落せしむるを欲せざるあり。人唯だ自ら重んず、故に已に克つ、故に習煉す、故に清高ある趣味の標準によりて自ら律す、故に謙和となり、故に崇高の精神を揮擢え、故に雅量能く人と物とを容ると。嗚呼自重の徳に於て斯の如し、況んや自重の極ある抱負に於てをや。

彼の腰を折りて人に媚び、膝を屈えて人に阿るものゝ如き。事業成熟の道は權謀術數の裡にありと思意するものゝ如き。或は笑ふべからざるに笑ひ、怒るべからざるに怒り、泣くべからざるに泣き、喜ぶべからざるに喜び、歌ふべからざるに歌ひ、舞ふべからざるに舞ふ如き。其他偽善、詐僞、放恣、驕奢、怠惰等の惡徳は皆已れを信せず自重心なきによる。即ち抱負なきによる。この已れを信じ已れを重む、天上天下唯我獨尊の抱負に至りては、榮辱褒貶以外に蟬脫し、艱難辛苦以外に飄逸し、富貴も淫ず

べからず、威武も屈す可からず、詩の所謂我心匪石不可轉、我心匪席不可卷を一躍して、殆んど人間以上に超然たるものと云ふ可し。

雜 錄

爐 邊 閑 語

鎌 田 辰 郎

第一 理 想

花月を見て美といひ、山川を見て壯と云ふは其源をいつこよりか發したる。美といひ、壯と呼ぶべき標準あらざる可らず、物の直きと云ふはその直き標準に合する爲めに出てたる言葉にあらざるや。花月山川に於ても、豫て其人の心中に描く所の標準に照らして語る言葉に非ざる歟。然らば其人がしる思ふ標準ある者は果して何者ぞや。こは我が所謂理想中に属すべき思想にはあらざるか。

誰か理想をば事實に非らずと云ふ。試みに思へ、人間各個が語り、又行ふ所の者は一として、ある理想を標準として發する者に非らずや。人は理想をくして事物に接し得るか。書を讀み筆を執るはさらず、足の運ぶ所、眼の動く、耳口の働く、手足の運動する一として理想をくして然る者やある。勿論なり、こは完全なる理想に依てのみ然るにあらざることや。さき之をしも事實にあらすと云は、何物をか事實と云ふを得べき。

誰か理想を空想と云ふ。空想とは成し得へからざるもの又成し得べきも行はずえて得んと欲する想に非らずや。空中に樓閣を造らんは空想なり、瓢箪より駒を出さんとするは空想なり。墮落青年が下